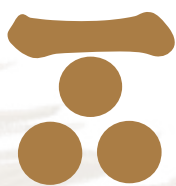


寒河江ふるさととの歴史

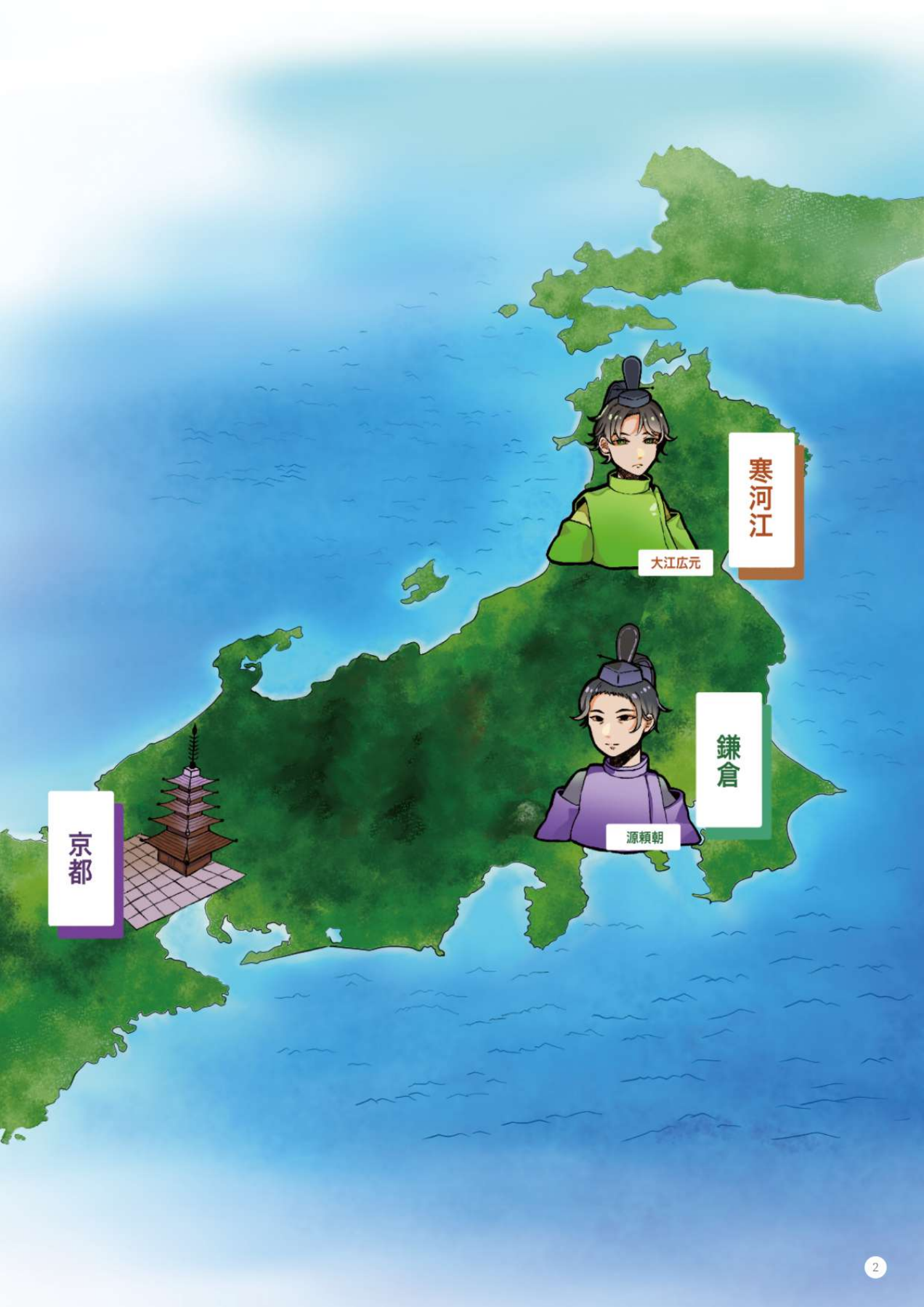
大江公物語

HISTORY
OF THE
SAGAE
OE CLAN



寒河江ふるさと
の歴史

大江公物語



寒河江

大江広元

鎌倉

源頼朝

京都



頼朝の重臣広元公

—— 頼朝と広元 ——

平家をほろぼし、鎌倉に幕府を開いた源頼朝。新しい武士の世の中を作った頼朝とわたしたちの町寒河江は深いつながりがあります。

そう聞くと、日本の歴史が急に身近になってきますが、寒河江と鎌倉、さあ、どのようにつながっているのでしょうか。

頼朝が大変信頼し、政所の別当という大切な仕事をさせていたのが大江広元です。広元は京都の公家で朝廷の様子をよく知り、法律や文書にもくわしい人でした。このことは、武家政治の基礎を作る時、なくてはならないものです。

頼朝が亡くなった後、争いのため源氏は三代で絶えましたが、広元は尼将軍政子（頼朝の妻）を助けて幕府の危機をすくっています。





広元寒河江荘を与えられる

——鎌倉と寒河江がむすばれた——

頼朝よりともは奥州平泉おうしゅうひらいすみ（岩手県いわて）にのがれた弟の義経よしつねを追いつめ、かくまっていた藤原氏ふじわらしと共にほろぼしてしまいました。このとき中心になって働き、全国しゆに守護ご・地頭じとうをおくようすすめたのが広元ひろもとで、それが幕府ぼくふの力を作るもとなりました。

文治五年ぶんじ（一一八九）十一月、頼朝はそのほうびとして寒河江ながいと長井ながいの二つの荘しやうを広元ひろもとに与あたえました。

幕府ぼくふの重要な仕事じゆうぎょうをしており、関東地方にも多くの荘しやうを持っていた広元ひろもとは、自分の妻つまの父ちちにあたる多田仁綱ただのりつなに寒河江荘さかえのしやうをおさめさせました。仁綱よくとしは翌年よくとしの文治六年ぶんじ（一一九〇）四月、寒河江ながいに入いり、本楯もとだてに住すむこととなります。寒河江ながいと鎌倉かまくらはここでつながりました。

本楯の館の主

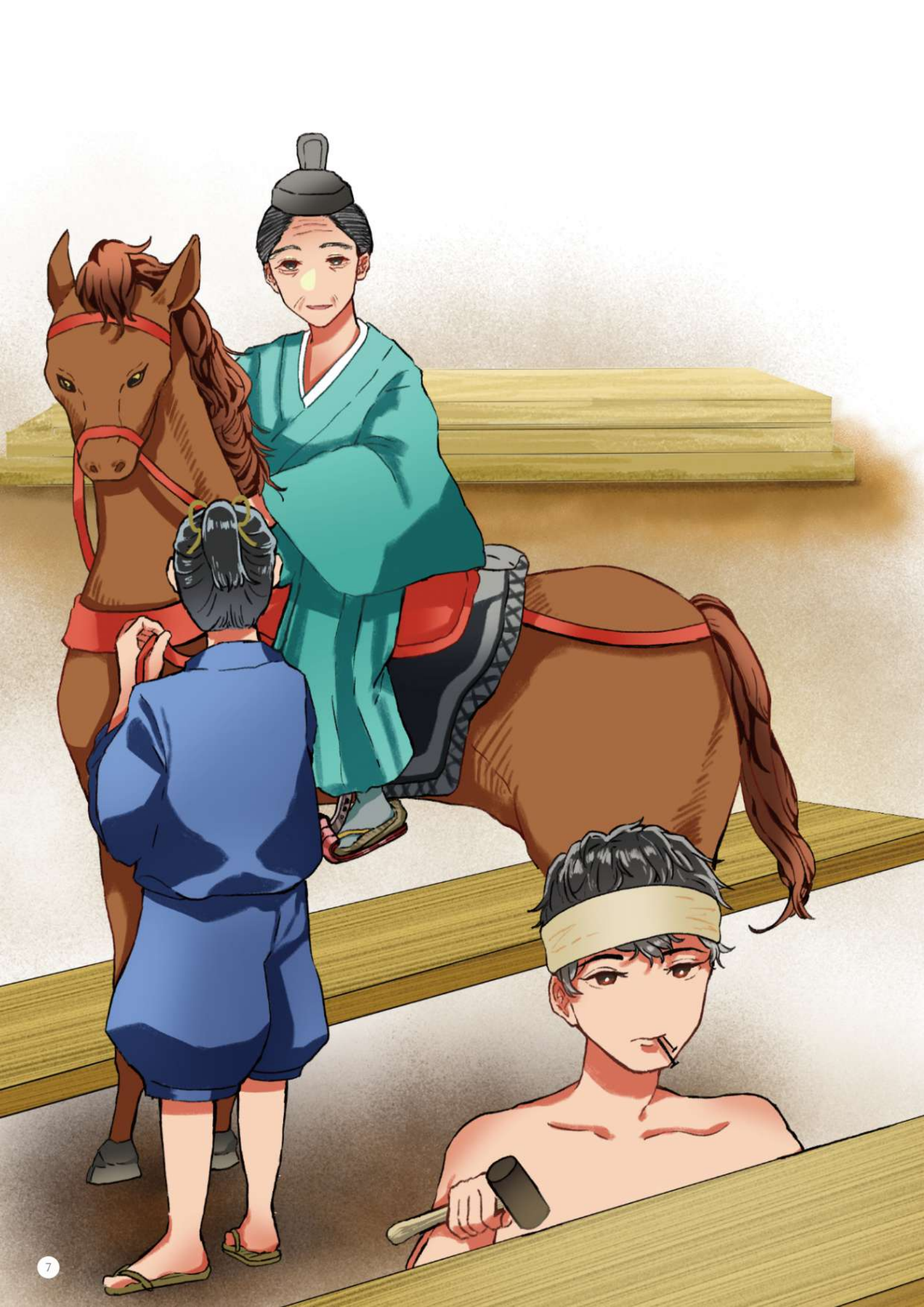
—— 多田仁綱 ——

寒河江莊さがえのしょうに着いた仁綱のりつなは、本楯もとだてに土塁どるいを築き堀ほりをめぐらし、最初の館やかたを作りました。本楯の入り口には、堀の跡あとが今もあり、この辺りあたを「土井の内どいのうち」とよんでいます。

仁綱は摂州せつしゅう（兵庫ひょうご県）吉川村よしかわの生まれです。寒河江莊をおさめてしばらくすると、ふるさと吉川よしかわのことが、思い出されてなりませんでした。しかし領地りょうちを離れて帰はなることはできません。

そんな時、寒河江川の中流に、吉川村そっくりの所を見つけました。仁綱はそこを「吉川」と名づけ、そこにも館を建てました。

仁綱がふるさとをしのび、いこいの地としたといわれるのは今の西川町にしかわ吉川よしかわのことです。





承久の乱にやぶれて

——京をのがれる親広——

広元ひろもとの長男おおえのちかひろ、大江親広きやうととしゆごが京都守護きやうととしゆごについていた時、朝廷ちやうていを中心に幕府ぼくふを倒す計画たおが進められていました。親広は朝廷の味方みかたとして、父広元ちやうなんすけふさ、長男佐房ちやうなんすけふさのいる幕府軍と戦う破目はめになってしまいました。

「幕府を討て。」後鳥羽上皇ごとろばじやうほうの命令めいれいが出て、戦いが始まりました。承久三年じやうきゆ（一二二二）五月のことです。

幕府軍がすぐさま京きやうへ攻めせのぼってきたのに、朝廷方ていていにつく武士は少なく、六月十三日、とうとう親広方は敗やぶれてしまいました。

「こうなれば、たよれるのは寒河江さがえのしまつだけだ。」親広は、祖父仁綱そふのりつなの住む寒河江さかまがはめざして京をのがれました。従したがうのはわずかな家来けらい。近江おうみ（滋賀しが県）からの道は遠いものでした。



よくぞご無事で

—— 親広と仁綱の再会 ——

ある夜、やみにまぎれ、ひそかに訪れた武士たちを見て、仁綱は驚きました。心配していた孫の親広たちではないでしょうか。

「よくぞ、ご無事で。うれしゅうござる。」

年老いた仁綱の喜びは大きいものでした。

幕府のきびしい目を恐れ、仁綱はまず、親広たちを吉川（西川町）にかくまい、さらに富沢（大江町）に移しています。

富沢は、前は最上川の断崖、後ろは山で、かくれ住むにはちょうどよい所ですが、なお対岸やまわりには、見張りまでおいたといえます。

幕府の許しがでるまで、親広は十年もここに身をひそめていました。



初代の殿さま親広公

—— つみゆるされる大江親広 ——

幕府のいかりがとけ、ようやく自由の身となった親広は、寒河江の初代の殿さまとなりました。

その後、本榎から長岡山に城を移そうとしましたがはたせず、きれいな水が湧き出ている内榎に館城をつくりました。今の寒河江小学校のところです。

しかし父広元は、すでになくなっていました。

親広は、「自分が、今こうしていられるのも、父のあたたかい心があったからだ。」と、亡き父を慕い、鎌倉の仏師に阿弥陀様を造らせました。その阿弥陀様の胎内に、父の遺骨を納め、あつくとむらいました。

月山が美しく見える吉川の阿弥陀屋敷には、親広と仁綱の二つの五輪塔が今も建っています。

建てなおせ慈恩寺

—— 大江元顕 ——

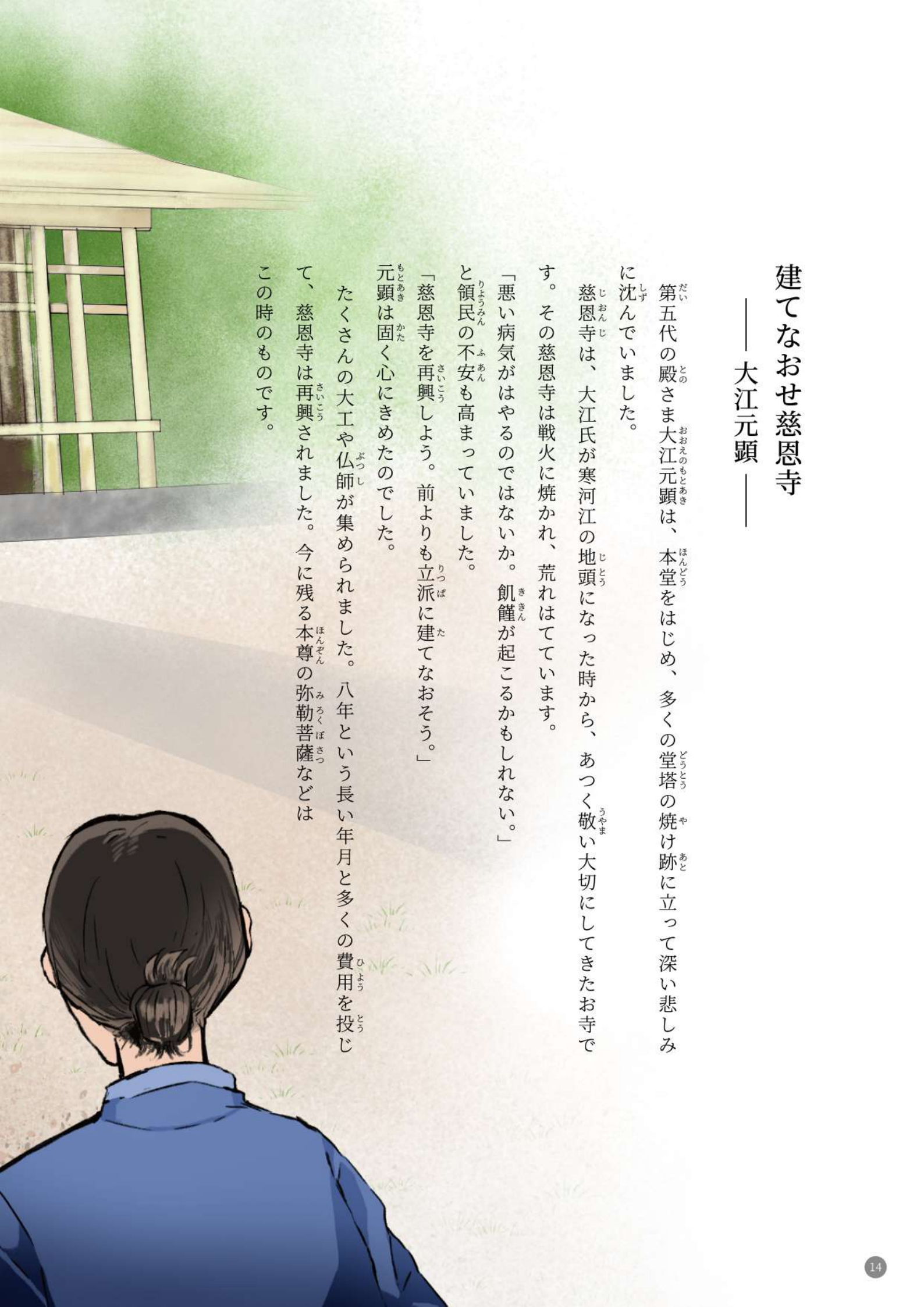
第五代の殿さま大江元顕は、本堂をはじめ、多くの堂塔の焼け跡に立って深い悲しみに沈んでいました。

慈恩寺は、大江氏が寒河江の地頭になった時から、あつく敬い大切にしてきたお寺です。その慈恩寺は戦火に焼かれ、荒れはてています。

「悪い病気がはやるのではないか。飢饉が起こるかもしれない。」
と領民の不安も高まっていました。

「慈恩寺を再興しよう。前よりも立派に建てなおそう。」
元顕は固く心にきめたのでした。

たくさんの大工や仏師が集められました。八年という長い年月と多くの費用を投じて、慈恩寺は再興されました。今に残る本尊の弥勒菩薩などはこの時のものです。





いくさつづく中で

—— 大江時茂と斯波軍 ——

鎌倉幕府が倒れると、都では、足利氏（北朝方）と後醍醐

天皇方（南朝方）に分かれて、争いが起こりました。その

争いは、地方に広がり、寒河江にまでおよびました。

寒河江は南朝方に味方をしました。

山形には北朝方の斯波兼頼が入りました。



この北朝方との戦いで父元政をなくした大江時茂はだんだん強大になる斯波氏との対立で苦しんでいました。

「自分の領地をまとめ、守りを固めることだ。」と考えた時茂は長男の茂信を書院に呼んで、「斯波はまた襲ってくる。溝延に城を築き、北を守れ。」

と命じました。

さらに時茂は、一族を柴橋・小泉・左沢など各地に配して防備を固めました。

これらの拠点には楯（城）が築かれムラができました。今の寒河江・西村山といったまとまりのある町や村はこうしてできていったのでした。



若殿が討たれた

—— 斯波軍と戦う茂信 ——

ついに、北朝方の斯波氏が大軍を率いて南朝方の大江氏を攻めてきました。戦の上手な斯波軍は、正面攻撃をさけ、今の朝日町の方から進んできました。

大江軍は溝延の茂信を総大将とし、漆川で迎えうたと進軍しました。

ところが、斯波軍は兵を二手に分けて進み、別の一隊は背後にまわりこみました。大江軍は、目の前の左沢城へ逃げこむことさえできず、茂信はじめ六十
一名全滅となりました。

寒河江城主大江時茂は深く悲しみ、死ぬまぎわに斯波氏に降伏することを遣
言しました。

こうして、斯波氏との戦いは終わりました。

大江氏は時氏の代へと移っていきました。



三重の堀をめぐるす

—— 大江時氏 ——

八代時氏は、これまで小
さな館にすぎなかった寒河
江の城を、西村山を領する
殿さまが住むにふさわしい
城に大改修しました。

大勢の人夫が集められ、
工事のつち音がにぎやかに
響きわたりました。木材が
運び込まれ、堀が掘られ、
土塁が築かれました。

こうして、九代元時の頃まで長い
年月を費やして三重の堀に囲まれた
雄壮な寒河江城ができあがりまし
た。



「なんととりっぱなお城だろう。」
城を一目見ようと集まった人々
から驚きの声があがりました。
その後二百年、大江の殿さまは
代々ここに住んで、およそ八万
石の領地をおさめたのです。
本丸跡は、今寒河江小学校
になっています。



にぎわう町

—— 寒河江の町の形ができる ——

堀ほりにかけられた橋のむこうには立派りっぱな
大手門おおもんがあり、その前の道を荷物にものを背せ
負おった人々ひとがいそがしそうに行きかっ
ています。

町まちごとに市いちがたち、村々むらむらから持ちよら
れた農産物のうさんぶつや遠くから運ばれた品物しやうぶつが取
引ひきされました。

壮大そうだいな寒河江城さむがえが完成すると、武士ぶしの
屋敷やしきが作られ、落衣おとしもなどにあった大きな
寺てらが移され城下町じやうかまちが発達はつたつしました。
人々ひとが集まり、町まちが栄さかえました。



寒河江川の水を取り入れた二の堰せきが新
しく掘ほられ、田畑が開かれていきました。
そして、その水は町の人々の生活にも使
われたのです。

また、寒河江しやう荘まもの守り神がみ、寒河江八幡はちまん
宮ぐうでは、勇いさましいやぶさめなども行われ
ました。

そのころの町のつくりや行事が、四百
年たった今も生き続けています。





伊達軍が攻めてくる

——桑折播磨と戦う——

伊達氏（政宗の祖）が置賜地方をおさめていた頃、

伊達成宗との間に所領をめぐる争いが起こりました。寒

河江を攻めたのは成宗の家臣、桑折播磨守宗義という勇

猛で名高い武将です。

十二代為広は、仲違いしていた大江一族の力をまと

め、播磨守の軍勢を天神原から菖蒲沼（長岡山の北）にかけて迎え撃ちました。

知略に秀でた為広は、逃げると見せかけて、播磨守をおびきよせると、ひしひしととり囲んでしまいました。

「もはやこれまで。」

覚悟した播磨守は自刃して果てました。

激しく苦しい戦いでしたが、大江一族は力を合わせることで、寒河江を守り抜くことができましたのです。



寄りそう五輪塔

—— 平和な日々 ——

大江氏十八代の治世の中で、最も栄え、そして平和だったのが十三代知広の時代です。

しかし、わずかに在位八年でこの世を去ってしまいました。

一族にとって悲しい出来事でした。中でも、奥方の嘆きは大きいものでした。奥方は、はるばる山口県の大寧寺から澄江寺を寒河江に移して、亡き夫を供養しました。

大寧寺は、大江家から出た全岩和尚が住職であることから、土地を寄進するなど、知広の信仰の深い寺だったからです。





寒河江に移った澄江寺へ、奥
方は城から参道を新しく作り、
毎日のように参詣しました。今
でも、知広と奥方の二つの五輪
塔が寄りそうように建っていま
す。



姫のために祈って

—— 滝姫と成元 ——

十四代宗広むねひろの娘、滝姫たきひめはとても美しい姫君ひめぎみでした。

十八歳さいの夏、重い病びょう気にかかりもう助すけからないというとき、宗広むねひろは日頃しんこう信仰しんこうしている十一面観音かんのんが「南なんから来る青年修験者しゅげんじやに頼たのみなさい。」と告つげている夢ゆめをみましました。お告つげのとおり現れたのは羽黒山はぐろさんへ向むかうとちゅうの若い修験者しゅげんじや、近江国おうみのくに（滋賀しが県けん）の大江成元おおえのしげもとでした。

頼たのみを受けた成元しげもとは、七日七晩いっしつしちばん観音くわんおんに向むかかって一心いっしんに祈いのりました。真心まごころが通とじ、姫ひめの病びょう気きはたちまち良よくなりました。滝姫たきひめも宗広むねひろも城中じやうちゆうの人々ひとらも、学問がくもんに優すぐ



れ、誠実な人柄の成元にすっかり心をとらえられ、このまま寒河江にとどまってほしいと強く願いました。姫と結ばれた成元は、寒河江城を守るために祈り続け、姫もその喜びをお経の刺繍にして表しています。

殿さまはまだ三歳

—— 幼い領主孝広 ——

時は戦国時代、武将たちは野望に燃え互に争う世の中となっていました。大江孝広は、このような時代にわずか三歳で寒河江城主となりました。



「若い殿さまをもちたてよう。」

家来たちは、励まし合いました。

この頃、大江氏は最上氏や伊達氏の戦乱に巻き込まれていました。

また、慈恩寺も焼かれてしまいました。「永正の兵乱」といわれています。

相次ぐ戦乱に、心を残しながら、孝広は二十五歳にして病死してしまいました。孝広なきあとも大江氏の団結は固く、一丸となって寒河江を守り、危機をのりこえていきました。





絵からぬけ出す馬

—— 郷目右京進貞繁 ——

慈恩寺本堂の正面に、二枚の馬の絵
がかけられてあります。前足を上げて
今にもかけ出そうとしています。あま
りにも上手にえがかれてあるので、
夜な夜な田畑を荒らして困るほど
だったといえます。

これほどの腕前をもった絵師はいっ
たい誰なのでしょう。

十五代大江孝広の家来に郷目右京進
貞繁さだしげという武士がいました。貞繁は、
米沢の伊達氏だてしと戦ったときに捕虜ほりよとな
り米沢につれて行かれました。



許ゆるされて寒河江に帰るまでの五年間、好きな絵をかいてさびしさをまぎらわしていたのでしよう。その後、京都で本格的ほんかくてきに絵の修行しゆぎやうをしたと言われています。

仏教の絵や風景画など、貞繁の絵は今も大切にされて残っています。





勘十郎さえ討ちとれば

—— 羽柴勘十郎の奮戦 ——

十八代大江高基おおえのたかもとの弟に羽柴勘十郎はしばかんじゅうろう頼綱のりつなという武士がいました。若いごうゆうが剛勇の人だったので、寒河江城の家老かろうになりました。

その頃、山形県の大半を征服せいふくした最上義光もがみよしあきは、寒河江・西村山地方をねらってきました。

ですが、勘十郎の守る寒河江城は強く、最上軍は退却たいきやくするしかありませんでした。

「勘十郎さえ討ちとれば。」

義光はくやしそうにつぶやきました。そして、負けたふりをして退却たいきやくし、追おってきた勘十郎を鉄砲てつぱうで撃ち殺ころすことを思いつきました。

作戦は成功しました。勘十郎は長刀おこなぎなたをふりかざし、最上軍を追いしました。その時、鉄砲の音が響ひびき、ついに羽柴勘十郎は倒たおれたのです。

御楯山の落日

—— 大江家十八代で滅ぶ ——

天正十二年（一五八四）六月二十八日、最上義光の
大軍は寒河江城に襲いかかりました。

羽柴勘十郎を失った寒河江軍は総くずれとなりま
した。城主大江高基は城を捨て、月布川上流の貫見
（大江町）に落ちていきました。

それを追って、最上軍はなおも攻め寄せました。

「大江家もこれまでか。」

高基は、御楯山に登って自刃してしまいました。こ
の時、入間右エ門介・高屋新右エ門・溝谷又十郎の
三人も殿さまの後を追いました。

鎌倉以来四百年も続いた大江氏も、十八代高基を
最後にこのようにして滅びました。

妻の琴姫は、寺を建てて夫の菩提をとむらったと
いいます。

高基の墓は御楯山の頂にあり、まるで寒河江を
見守っているかのように見えます。



おうちの方と先生方へ Ⅰ旧版よりⅠ

この絵本は、寒河江西村山地方の発展の基礎を築いた大江氏はどんな領主であったかを小学生にも分かるように書いたもので大江公入部八百年記念事業の一つです。歴史の専門用語が出ていたり、短い解説文のため歴史の背景やその推移が分からなかったりするとこころもあるのではないかと思います。その時は「もっと調べてみたい人のために」などを手がかりにお子さんといっしょに読んでみて下さい。そしてふるさとの歴史に目を向け、ふるさとを愛し、ますますその発展を願う子どもに育ててほしいと思います。

さて、寒河江の人々は大江氏のことを代々「大江公」というように敬称をつけて呼び慣らわしてきました。大江氏が代々文章道（歴史・詩文）を司る京都の貴族の家柄だったからです。つまり学者の家柄だったわけです。そして大江氏が領主であることをずっと誇りに思っていたのです。

文治五年（一一八九）源頼朝の補佐役を勤めていた大江広元に寒河江荘が与えられます。その後広元は政所の別当になります。この年から数えて今年が丁度八百年にあたるわけです。広元は、妻の父多田仁綱を寒河江に派遣しました。仁綱は本楯に館城を築き最上川以西を治めたのです。

以後、大江氏の寒河江荘支配は十八代四百年も続きます。大江氏のように四百年も続いた例は珍しいといえそうです。

それでは、大江氏のうっぴりかわりをふり返ってみま

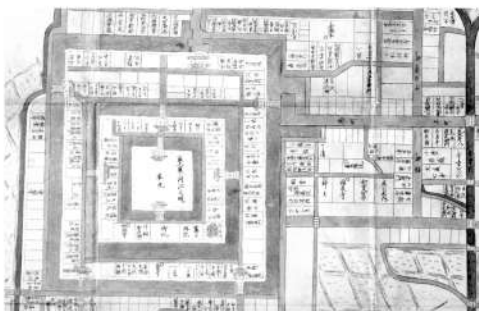
しょう。初代の親広、つまり広元の長男は、承久の乱に敗れて寒河江へ逃れてきて隠れます。その後許されて、寒河江の内楯に館城を築きます。二代の高元は早死したので、その奥方が治めていた時、北寒河江荘（今の河北町方面）は幕府に没収されてしまいました。三代広時、四代政広は鎌倉で活躍しています。大江の殿様が寒河江に来て直接治めたのは、五代元顕からです。大江氏の一族がこの頃鎌倉から羽州寒河江に下ったと考えられています。元顕は慈恩寺を再建しています。

六代元政の頃から南北朝の争乱に巻き込まれます。元政は南朝方（宮方）に立って北朝方と戦い討死しました。山形には北朝（武家方）の斯波氏が入部しておりました。その後大江氏はこの山形勢と戦います。

七代時茂は大江一族を西村山各地に置いて最上川の西部を固めました。そして漆川で北朝と戦い敗れました。八代時氏は北朝と和睦をして寒河江氏と称しました。時氏はその子九代元時と共に寒河江城を構築し、その城下町を一新しました。

十代元高は千手院、十一代高重は本願寺、十二代為広は常泉院を開きました。この頃、米沢の伊達氏が二度攻めて来ました。菖蒲沼の戦いです。寒河江方が勝利しました。十三代知広の時代は最も平和な時代でした。知広と奥方の墓は澄江寺にあります。十四代宗広は法泉寺を開きました。

十五代孝広の頃は戦国時代でした。山形の最上義定



寒河江城古図



大江親広（中央）・多田仁綱（右）の墓
〈西川町吉川・阿弥陀屋敷〉

が二度も寒河江を攻めて来ました。しかし大江一族がこれを撃退しました。また山形・寒河江の連合軍が米沢の伊達軍と戦いました。更に孝広は上山を助けて伊達軍と戦いました。この時郷目右京進貞繁達が捕虜となったのでした。その翌年は伊達軍が葛西・相馬・斯波と連合して寒河江を攻めてきました。しかしこれは和睦しました。孝広は陽春院を開きました。十六代広種は福泉寺を開きました。

十七代は兼広です。まさに戦国乱世の時代でした。山形の最上義光は反義光派を征伐し、領国を固め鉄砲を取り入れ軍備を整えました。そして河西に勢力を張っていた大江氏を倒そうとしました。

天正十二年（一五八四）六月、まず谷地の白鳥十郎を山形城で謀殺しました。続いて寒河江城を攻略しました。十八代高基は家来と共に御楯山で自刃し、四百年に亘る大江氏支配は終わりました。

最上氏について山形に移った大江氏の家臣もいましたが、大半は土着し寒河江西村山各地でムラの指導者となりました。

さて、大江氏が寒河江・西村山という一地域に四百年にも亘って支配し続けることができた要因は何であったのでしょうか。

まず最上川・寒河江川の両河川で境界をなし天然の領国が形成されたことがあげられます。次に武家方と対抗し大江一族を各地に分封して強力な防備体制をしていたことです。

三番目に各地の開発主となって堰を作り田畑を開き生産基盤を確立して財政を豊かにしたことです。四番

目には強大な宗教集団である慈恩寺、大沼、平塩熊野神社等と結びこれに援助を行うと共に強い支持を得ていたことです。

五番目に各地の寺社に援助をして民衆の支持を受けていたことがあげられます。

寒河江城を始め各地の城を中心として城下町が作られました。これが現在の町形のもととなっています。田畑もその頃の開発によるものが多く、寺社も今に宗教文化を伝えています。大江氏は今日の寒河江・西村山の文化的風土の形成に大きな足跡を残したといえます。

その後、ほんの短い期間最上氏が治め、続いて鳥居氏の支配がありました。以後、徳川幕府の直轄地（幕領）となり江戸から代官が来て寒河江を支配しました。そして明治・大正を経て昭和の現在に至りました。こうして寒河江は大江氏の入部以来八百年を経過したのでです。

この編集では、大江氏支配の四百年の中で象徴的なことから取り上げ八人の先生方に絵と文を分けて書いていただきました。多くの皆さんに読んでほしいと思っています。

リライト版追記

旧版刊行後の研究により、大江親広は安貞元年（一二二七）に尾張国（今の愛知県）で亡くなったという史料が発見されました。



御楯山（大江町貫見）



大江知広・同夫人の墓（澄江寺）

もっと調べたい人のために

武士の世の中へ		貴族の世の中		時代	
(南北朝時代) 1400		鎌倉時代 1300 1200			平安時代
14		13		12	世紀
<p>○南朝と北朝の対立が続く</p> <p>○金閣ができる(一三九七)</p> <p>応仁の乱がおこる(一四六七)</p>		<p>元が二度もせめてくる(一二七四、一二八一)</p> <p>鎌倉幕府ほろびる(一二三三)</p> <p>足利尊氏が京都に幕府を開く(一二三八)</p>		<p>守護・地頭をおく</p> <p>源頼朝が鎌倉に幕府を開く(一一八五)</p> <p>源氏が三代でほろびる(一二二二)</p> <p>承久の乱がおきる(一二二二)</p>	
<p>この頃二の堰が整えられる</p> <p>八代大江時氏・九代元時の頃、寒河江城完成する</p> <p>この頃飢饉が続く(一四二二)</p>		<p>五代大江元顕慈恩寺を再建する(一三〇六)</p> <p>山形に北朝方の斯波兼頼が入る(一二五六)</p> <p>大江元政北朝方と戦う(一三五九)</p> <p>大江氏漆川で北朝方と戦う(一二六八)</p>		<p>初代大江親広承久の乱にやぶれ、寒河江にかくれすむ(一二二二)</p> <p>大江広元が亡くなる(一二二五)</p> <p>大江親広が亡くなる(一二二七)</p> <p>多田仁綱が亡くなる(一二三四)</p> <p>大江広元が寒河江の地頭となる(一二八九)</p> <p>多田仁綱が本楯に入る(一一九〇)</p> <p>広元が政所の別当となる(一一九二)</p>	寒河江の動き

大江家世代系統図



安土桃山時代	(戦国時代)	室町 1500
16		15
<p>○鉄砲が伝わる(一五四三)</p> <p>○キリスト教が伝わる(一五四九)</p> <p>織田信長が室町幕府をほろぼす(一五七三)</p> <p>豊臣秀吉が全国を統一する(一五九〇)</p>		
<p>○参考にした本 「寒河江市史年表」「大江系図(一)(二)」「郷目右京進貞繁」「青少年のためのさがえの歩み」「寒河江城を語る」「寒河江大江古城図」……市立図書館にあります。</p> <p>○参考となる本 『寒河江市史 上巻』『寒河江市史 大江氏ならびに関係史料』『寒河江市史 環境・考古編』『新編 寒河江の歴史年表』『ふるさと寒河江の歴史』</p>		
<p>十二代大江為広の頃、米沢の伊達成宗寒河江をせめる(一四八〇)</p> <p>この頃澄江寺がたてられる(一四九四)</p> <p>慈恩寺全体が焼かれる(一五〇四)</p> <p>米沢の伊達氏、天童高楡をせめる(一五一七)</p> <p>米沢の伊達氏、寒河江をせめる(一五二一)</p> <p>最上義守寒河江をせめる(一五六〇)</p> <p>郷目右京進、慈恩寺に絵馬をおさめる(一五五八)</p> <p>十八代大江高基、庄内へ出兵する(一五八三)</p> <p>白鳥十郎、最上義光に殺される(一五八四)</p> <p>大江高基御楯山で亡くなる(一五八四)</p>		

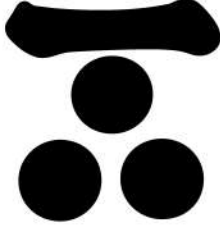
あとがき

昭和六十三（一九八八）年に発刊された『大江公物語』が、このたびリライトして再び世に出ることとなりました。旧版は、大江広元が寒河江荘の地頭となった文治五（一一八九）年から八百年となることから、大江公入部八百年祭記念事業実行委員会を立ち上げ、その事業の一つとして作られたものでした。

旧版の発刊以来、この三十年余りの間に『寒河江市史 大江氏ならびに関係史料』が発刊され、親広が安貞元（一二二七）年に尾張国（今の愛知県）で亡くなったことを示す記録が見つかるなど、大江氏に関する研究も進展しました。

このたびのリライト版は、寒河江に伝えられてきた歴史を重んじ、旧版を踏襲した内容としています。研究の進展により内容が変わっていくことも考えられますが、大江氏が治めた四百年の間に、寒河江に多くの足跡を残したことは変わりありません。この本を読んで、寒河江の歴史に関心を持っていただければ幸いです。

大江家の家紋



大江氏の家紋は一文字三星^{いちもんじみつぼし}と呼ばれている。また大江氏の支族毛利氏が長門国を領したので長門三星^{ながとみつぼし}ともいわれる。

三星はオリオン座の中央に並ぶ三個の星で中国では將軍星といい、中央を大將軍、両わき（南北）を左右將軍といった。將軍というから武家に用いられた。

三星の上に一をつければ一文字三星、下に一をつければ三星一文字という。一をつけるのは敵にカツ（勝）の意味で、一をカツと読ませることが鎌倉時代から流行した。（阿部酉喜夫記）

リライト版の作成にあたり、イラストを親しみやすくするため、服装や髪型などを現代風にしています。

寒河江ふるさとの歴史 大江公物語

令和四年二月一日 改訂版

発行 寒河江市教育委員会

生涯学習課

編集（旧版）

宇井 啓

佐藤 源四郎

佐藤 美喜子

工藤 正年

森田 国宏

高橋 正圀

古城 英三

高梨 理

〔製作／イラスト・デザイン・DTP〕

アイケイアイプラン

総合ディレクション 菅野 治

イラスト／人物 倉持 希

イラスト／背景 佐藤 綾子

